

平成20年度（第52回）
岩手県教育研究発表会

特別支援教育 / 幼児教育

幼稚園における幼児一人一人が 共に育ち合う指導の在り方に関する研究

特別支援教育園内体制の構築をとおして

研究協力園
県内公立幼稚園 2園

研究協力員
盛岡市立米内幼稚園 園長 菊池 留美子
一関市立舞川幼稚園 園長 沖田 誠子
花巻市立花巻幼稚園 教頭 北山 郁代

平成21年1月7日
岩手県立総合教育センター

特別支援教育担当	教科領域教育担当
吉田 孝次	佐々木 恵理子
佐藤 信	
杉本 光生	
川村 憲弘	

目 次

研究目的	1
研究の年次計画	1
本年度の研究内容与方法	1
1 研究の目標	1
2 研究内容与方法	1
3 研究協力園	2
昨年度の研究の概要	2
1 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本構想	2
(1) 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本的考え方	2
(2) 幼稚園における園内支援体制の構築の基本的考え方	3
2 手だてにかかわる調査結果の分析と考察	6
(1) 調査の目的	6
(2) 調査の対象と回収率	6
(3) 調査項目	6
(4) 調査結果の分析と考察	6
(5) 保育ガイド作成の方向性	7
本年度の研究結果の分析と考察	7
1 「支援が必要な幼児の育ち合いを促す保育ガイド」の作成	7
(1) 保育ガイドの作成と活用のねらい	7
(2) 保育ガイドの概要	7
2 保育ガイドを活用した園内支援体制推進計画の構想と検証計画	11
(1) 保育ガイドを活用した園内支援体制推進計画	11
(2) 検証計画	12
3 指導実践及び実践結果の分析と考察	12
(1) 研究協力園の概要	12
(2) 推進計画に基づく指導実践及び分析と考察	12
(3) 事前事後調査の分析と考察	20
4 幼児一人一人が共に育ち合う指導に関する手だてのまとめ	24
(1) 成果	24
(2) 課題	24
研究のまとめ	25
1 研究の成果	25
2 今後の課題	26
<おわりに>	
【引用文献】	
【参考文献】	

研究目的

幼稚園は、幼児が教師や周囲の幼児たちと集団で生活をする中で、様々な人々とかかわり、多様な体験をとおして、生きる力の基礎を培う場である。特に、特別な教育的支援を必要とする幼児においては、家庭及び専門機関との連携を図りながら、全体的な発達を促す場として大切である。そのため幼稚園においては、幼児同士がかかわり合いを深め、幼児一人一人が共に育ち合うことができるように、教職員全員の共通理解に基づいた個々の発達に応じた指導を行っていくことが求められている。

しかし、幼稚園において、教師は特別な教育的支援を必要とする幼児の指導の在り方に一人で悩んでいることが多い。これは、特別な教育的支援が必要な幼児の理解や指導方法等が分からないことや、幼児一人一人がかかわりを深めるための指導が十分に行えないことが原因であると考えられる。また、幼稚園においては、学級を一人で担任することが多く、それを支える教職員間の共通理解に基づいた支援を行うための体制が整っていないことが考えられる。

こうした状況を改善していくためには、特別な教育的支援を必要とする幼児に対する教職員全員の共通理解を図り、園内協力による多様な指導形態や指導方法等の工夫をとおして幼児一人一人がかかわり合うことができるように指導していくことが必要であると考えられる。

そこで、本研究では、幼稚園における特別支援教育園内体制（以下、園内支援体制）を構築し、特別な教育的支援を必要とする幼児に対する具体的な支援についての検討、実践等をとおして、幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方を明らかにしようとするものである。

研究の年次計画

この研究は、平成19年度から平成20年度にわたる2年次研究である。

第1年次（平成19年度）

- ・ 県内の幼稚園における園内支援体制の現状と課題の把握
- ・ 園内支援体制の構築及び特別な支援を必要とする幼児への指導を行うための手だての作成
- ・ 指導実践

第2年次（平成20年度）

- ・ 「幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合いを促す保育ガイド」（以下、保育ガイド）の作成
- ・ 指導実践
- ・ 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方についてのまとめ

本年度の研究内容与方法

1 研究の目標

園内支援体制の構築と園内協力による幼児の支援のための保育ガイドを作成し、それに基づいた実践を行い、その結果の分析と考察をとおして、幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する研究のまとめを行う。併せて、実践をとおして保育ガイドの検討と修正、改善を行う。

2 研究内容与方法

- (1) 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本構想の立案（文献法）
幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方についての基本的な考え方をまとめるとともに、幼稚園における園内支援体制の構築の基本的な考え方をまとめ、本研究の基本

構想を立案する。

- (2) 幼稚園における園内支援体制にかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察（質問紙法）
基本構想に基づき、本県の国公立幼稚園を対象に実態調査を行い、その調査結果の分析と考察から手だての作成に必要な資料を得る。
- (3) 幼稚園における園内支援体制の構築及び支援のための手だての作成（文献法）
基本構想及び実態調査の結果とその考察に基づき、園内支援体制の構築のための手だてを検討し作成する。
- (4) 指導実践及び実践結果の分析と考察（指導実践，観察法，質問紙法）
手だての試案に基づいて指導実践を行うとともに、検証計画に基づいて実践結果の分析と考察を行う。

3 研究協力園

県内の公立幼稚園（2園）

昨年度の研究の概要

1 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本構想

(1) 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本的考え方

ア 幼稚園における特別支援教育の動向

幼稚園における特別支援教育について、平成15年3月に文部科学省から出された「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（以下、最終報告）の中で「幼児期からの支援を進めるためには、幼稚園全体で支援しあえるような体制の整備、日頃から保護者への理解を推進していくための研修等の充実」の必要性が示された。

同時に、平成15年度から文部科学省では、「幼稚園における障がいのある幼児の受け入れや指導に関する調査研究」を行っている。この調査は、特別な教育的支援を必要とする幼児（以下、支援を必要とする幼児）に対する個別の指導計画、教職員の協力体制や障がいに配慮した指導体制等の充実を図ることを目的としている。本県においては、平成16・17年度に一関地区が同調査の対象地域に指定された。

また、幼稚園教育においては、平成18年10月に策定された「幼児教育振興アクションプログラム」の中で、障がいのある幼児に対するきめ細やかな対応の推進を行うことが示されている。その具体策として、幼稚園における障がいのある幼児の受け入れを促進し、適切な指導及び必要な支援を行うため、実践的な調査研究を実施することや、発達障がいのある幼児を早期に発見し、幼児期からの支援体制を整備するように関係機関が連携して幼稚園への支援の促進に努めることが挙げられている。

こうした一連の流れは「障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会」（H17, 中教審答申）の実現を目指すというノーマライゼーションの理念を背景としており、幼稚園においても「特別な教育的ニーズを把握し、必要な教育的支援を行う」（最終報告）ことやそのための支援体制を整備することが求められていることを示している。

イ 幼児一人一人が共に育ち合う指導

幼稚園教育要領（平成10年）の人間関係に示されているねらいと内容から、本研究における幼児一人一人が共に育ち合うとは、幼児の発達段階に応じた自他とのかかわりの中でお互いを認め合い、支え合い、学び合いながら成長することと捉える。

幼稚園において、幼児は、教師や周囲の幼児たちと集団で生活する中で、様々な人々とかかわり、多様な体験をとおして、生きる力の基礎を培う。幼児は、多数の同年代の幼児とかかわり、気持ちを伝え合い、協力して活動に取り組んだり、時には、意見が合わずぶつかり合ったり、葛藤を感じたりするなどの体験をする。教師は、このような多様な体験ができるように環境を整え、他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わわせながら、お互いが刺激し合う中で、全体的な発達を促し、主体性や社会的態度を身に付けていくことができるように指導を行っていくことが大切である。

特にも、支援を必要とする幼児においては、集団生活に慣れにくかったり、友達と上手にかかわることが難しかったりすることが多い。しかし、適切な支援や配慮がなされれば、学級などの集団生活において、友達とかかわり、多様な体験をすることができることから、全体的な発達を促すことにつながると考える。また、学級の幼児にとっては、支援を必要とする幼児とのかかわりをとおして、お互いの存在を認め合い、助け合うことの大切さに気付くことなどが期待できる。

幼児一人一人が共に育ち合うためには、幼稚園という集団生活の場を生かし、教師がきめ細やかな指導を行うことが重要である。そのために、教師は、幼児一人一人の発達の特性を理解し、教師や幼児とのかかわりを深めることにより、育ち合いを促す指導をしていくことが大切である。

ウ 本県幼稚園における園内支援体制の整備状況

本県の国公立幼稚園の規模について見ると、学級数が3学級以下で職員数が7名以下の幼稚園は、75.8%（50園）と大半を占めている（平成19年度）。

平成18年度の文部科学省の調査【表1】から本県の国公立幼稚園における教育支援体制の整備状況について見ると、校内（園内）委員会の設置と特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）の指名では、小・中学校よりも教育支援体制の整備が遅れていることが分かる。また、個別の指導計画は、小・中学校に比べると作成されているが、まだ、十分とはいえない。

これらのことから、幼稚園においては、支援を必要とする幼児の実態に応じた指導の必要性が認識されてきているが、小規模な幼稚園が多く園内支援体制が構築できないでいることが考えられる。

【表1】 平成18年度岩手県の小・中学校、幼稚園における教育支援体制整備状況（文科省調査からの抜粋）

	校内委員会の設置	実態把握の実施	コーディネーターの指名	個別の指導計画の作成
幼稚園	22.4%	61.2%	26.9%	29.9%
小学校	99.5%	84.8%	100.0%	28.1%
中学校	99.5%	76.8%	100.0%	16.7%
全国平均	32.7%	62.6%	29.4%	18.0%

(2) 幼稚園における園内支援体制の構築の基本的考え方

幼稚園では、担任が一人で、支援を必要とする幼児に対して支援を行う状況や、保護者への対応を行うなどの状況がある。この状況を改善するためには、組織的な協力体制を構築していく必要がある。また、幼稚園教育の特徴である集団生活をとおして、幼児一人一人が共に育ち合う指導を進めていくためには、全教職員間の共通理解に基づいた指導が大切である。そのためには、支援を必要とする幼児や担任を支援するための園内支援体制を構築し、特別支援教育を園務分掌に位置付けた取組や、共通理解を図るための取組を行う必要がある。

併せて、公立幼稚園においては、小規模な幼稚園が大半を占めることから、各幼稚園の実情に

応じた組織づくりや支援が望まれる。

ア 園内支援体制の組織

園内支援体制の中核を担うものとして、園内委員会の設置とコーディネーターの指名があげられる。しかし、新たに園内委員会を設置することは、幼稚園の現状から難しいと考えられる。そこで、園内委員会やコーディネーターに期待される役割・機能を分担することで、園内支援体制が構築できるものとする。

(ア) 園内委員会等の設置

本研究における園内委員会とは、定例的に開催される会議等に特別支援教育の機能を付加し、活用したものである。園内委員会が、園内の支援体制を整えたり、幼児の共通理解を図ったりすることで、支援を必要とする幼児や担任への支援を行うことが可能になると考える。また、園内委員会が中心となり、研修会や研究会を実施することで、支援が必要な幼児の実態や具体的な支援方法についての検討、共通理解に基づいた指導を行うことができると考える。

(イ) コーディネーターの指名

コーディネーターは、幼稚園全体を見渡し、支援体制のコーディネートをしていく必要がある。しかし、コーディネーターの役割は、園内委員会や研修会等の企画・運営、担任への支援、そして、保護者の相談・支援など多岐にわたることから、一人で全ての役割を担うことは負担が大きいと思われる。そこで、関係機関との連絡は園長が行ったり、研修会の企画・運営は研究担当が行ったりするなど、その役割を教職員が分担することで、効率的な取組を行っていくことが可能であるとする。

イ 園内支援体制の機能

支援を必要とする幼児への指導・支援等の具体的実践を推進するための園内支援体制の機能として、次の4点を想定した。

(ア) 実態把握と気付きの促進

支援を必要とする幼児について、担任や保護者の気付きを促すことが、適切な支援を行うための第一歩である。そのためには、気になる幼児についての観察のポイントや気付きから支援にいたるまでの手順を示す必要があるとする。また、専門機関との相談の要点を提示する必要があるとする。

(イ) 園内研修の実施と充実

各担任の気付きを促したり、園内の共通理解を図ったりするためには、研修会を計画し、特別支援教育、及び支援を必要とする幼児への理解を深めていくことが大切であるとする。これまでの指導を蓄積することや、有効であった指導方法や実践について交流を図り、支援を必要とする幼児への指導の充実を図ることが重要であるとする。

(ウ) 関係機関との連携

支援を必要とする幼児は、保健や福祉、医療機関との連携が必要なケースが考えられる。関係機関からの情報を得ることや関係機関との共通理解を図ることは適切な支援を行うために大切であるとする。また、小学校へ入学する際には、これまで幼稚園で行ってきた支援内容や方法等について情報を引き継ぐことで、一貫した支援を行えるようにすることが重要であるとする。

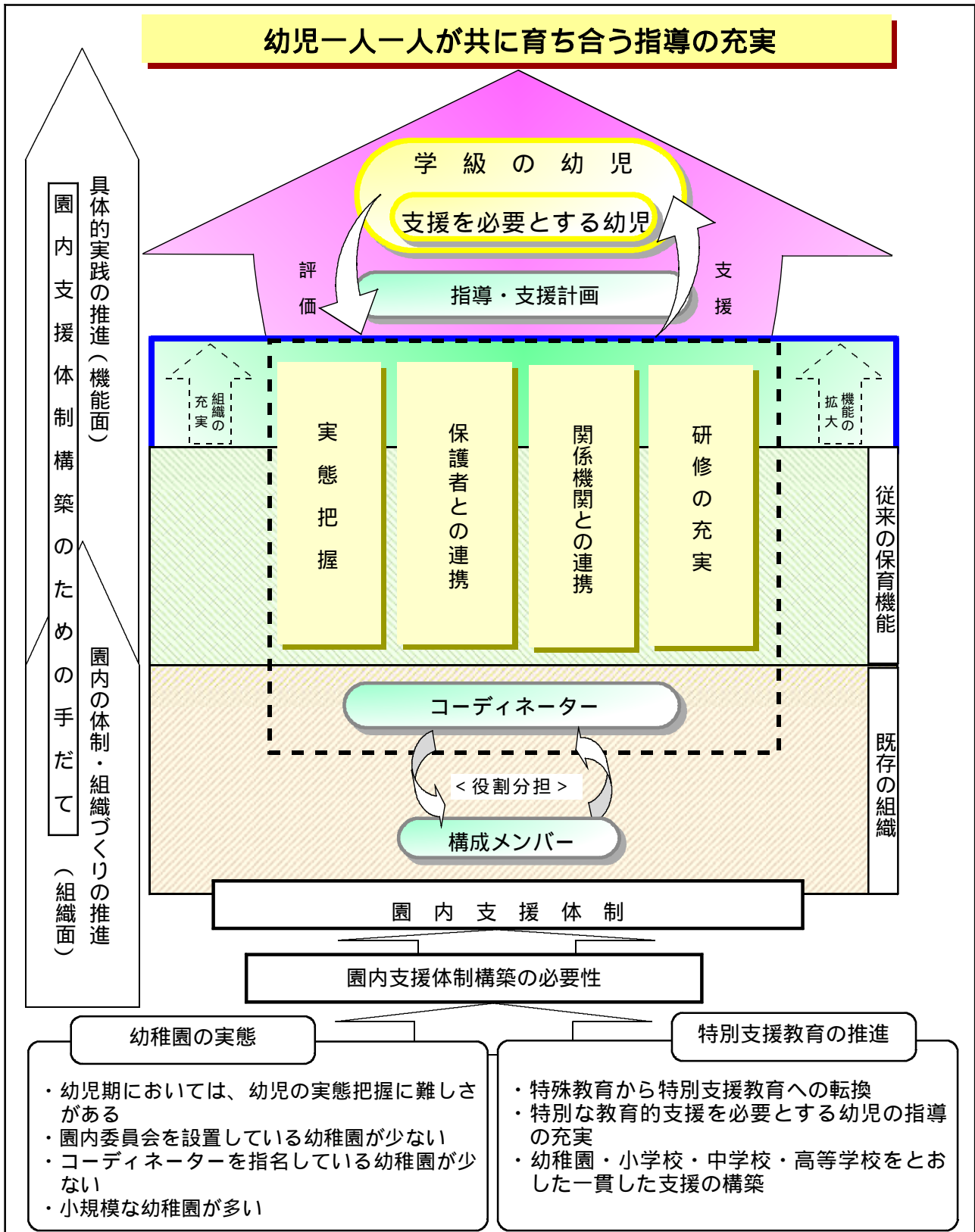
(エ) 保護者との連携

幼稚園・保護者・関係機関との共通理解に基づいた一貫した支援を行うためには、保護者との連携を図ることが必要である。そのためには、保護者の特別支援教育への理解、及び支援を必要

とする幼児への理解を深めていくことが必要であるとする。併せて、保護者の気持ちや願いをくみ取り、保護者への支援を行うことが大切であるとする。

ウ 本研究の基本構想図

基本的な考え方を踏まえ、幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本構想図を【図1】のように作成した。



【図1】幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する基本構想図

2 手だてにかかわる調査結果の分析と考察

(1) 調査の目的

県内の国公立幼稚園を対象に、支援を必要とする幼児に対する幼稚園における指導体制の現状と課題を明らかにし、支援を必要とする幼児への望ましい指導の在り方等の資料を得ようとするものである。

(2) 調査対象と回収率

県内の国公立幼稚園（国立幼稚園 1園，県立幼稚園 1園，市町村立幼稚園 64園，計 66園）
回収率 100.0%（66園中66園回答）

(3) 調査項目

調査項目は【表2】のとおりである。

【表2】調査項目

<p>特別な教育的支援を必要とする幼児の在籍</p> <p>問1 医師が診断した幼児の在籍 1 - A 障がい名，人数</p> <p>問2 支援を必要と判断した幼児の在籍 2 - A 判断の根拠 2 - C 判断できない理由</p> <p>特別な教育的支援を必要とする幼児への対応</p> <p>問3 支援を必要とする幼児へ対応する職員</p> <p>問4 日常的な情報交換の有無 4 - A 情報交換の方法（複数回答） 4 - B 情報交換の必要性</p> <p>問5 保護者への対応の担当者</p> <p>問6 保護者への対応の内容</p> <p>問7 関係機関との連携の有無 7 - A - ア 関係機関との連携の窓口 7 - A - イ 連携した関係機関</p>	<p>問8 対応への協議の有無 8 - A 協議のメンバー</p> <p>問9 園内委員会等の設置の有無 9 - A - ア 園内委員会等のメンバー 9 - A - イ 園内委員会等の役割 9 - B - ア 園内委員会等の必要性 9 - B - イ 園内委員会等の設置の方向性</p> <p>問10 コーディネーターの指名 10 - A - ア コーディネーターの職名と園務分掌 10 - A - イ コーディネーターの役割 10 - B コーディネーターの必要性</p> <p>支援を必要とする幼児へのこれまでの取組</p> <p>問11 これまでの取組（複数回答）</p> <p>支援を必要とする幼児の教育の課題</p> <p>問12 支援を必要とする幼児の教育の課題（自由記述）</p>
---	---

(4) 調査結果の分析と考察

調査の結果明らかとなったのは次の2点である。

ア 組織としての取組について

【現状】

平成19年度に行った調査の結果，国公立幼稚園における特別な支援を必要とする幼児の在園率は，4.4%（全園児数3,206名中140名）であった。また，園内委員会の設置は18.1%，コーディネーターの指名は27.7%であり，担当が中心となり，従来の保育の取組で対応しようとしていることが多かった。

【課題】

幼稚園では，特別な支援を必要とする幼児に対応しようとしているが，組織的な取組がまだ十分に行われていない。

【考察】

限られた人員の中での取組となることから，これまで幼稚園が行ってきた取組の見直しと整理を行い，必要な機能を焦点化する必要があることが明らかとなった。

職員会議等の既存の組織に特別支援教育の機能を付加するなど，幼稚園の実情に応じて園内支援体制を構築していく必要があることが明らかとなった。

イ 支援を必要とする幼児への指導にかかわる具体的な手だてについて

【現状】

調査の自由記述欄には，「子どもの姿が多様化しており判断が難しい」「研修で得た知識を基に手探りで指導している」「教員の専門性の向上と発達障がいへの理解を深める」等の記述がみられ，これまで行われてきた保育だけでは対応が難しいことがうかがわれた。

【課題】

特別な支援を必要とする幼児の実態把握や支援方法等への具体的な手だてが不足している。

【考察】

支援を必要とする幼児の実態把握，指導にかかわる研修の充実，保護者や関係機関との連携等を組織的に行うための具体的な手だて，方策が必要であることが明らかとなった。

(5) 保育ガイド作成の方向性

本研究の基本構想と調査の結果から，幼稚園における園内支援体制を構築し，これまでの保育を生かした園内協力による支援を進めていくために必要な内容を網羅した手引きとして「支援が必要な幼児の育ち合いを促す保育ガイド（第1次案）」（以下，保育ガイド）を作成することとした。保育ガイドの活用場面を，「園内支援体制の構築と推進」「幼児への支援の展開」の二つと想定した。【表3】に保育ガイド作成のための方向性を示す。

【表3】保育ガイド作成の方向性

園内支援体制の構築と推進	幼児への支援の展開
<ul style="list-style-type: none"> 職員会議等の既存の組織を活用した内容とする 園内委員会に支援を必要とする幼児の支援を行うための機能を取り入れた内容とする 園内支援体制を推進するためのシートを示す 	<ul style="list-style-type: none"> 支援を行う際の具体的な支援方法について示す 実態把握と支援計画の方法と支援計画を立案するためのシートを示す

本年度の研究結果の分析と考察

1 「支援が必要な幼児の育ち合いを促す保育ガイド」の作成

(1) 保育ガイドの作成と活用のねらい

保育ガイドとは，幼稚園の既存の組織や保育の取組を活用し，園内支援体制の構築と園内協力による幼児への支援の充実を図ることを目的として，園内支援体制についての基本的な考え方や推進の仕方，幼児の支援の方法，そこで活用できるシート等を提示したものである。

保育ガイドは，園内支援体制や支援の基本的考え方を示したものであり，幼稚園の規模や職員構成，幼児の実態等の実情に合わせて，必要な部分を参考にして活用されることを前提としている。

保育ガイドが園長をはじめコーディネーター，学級担任等々に活用されることで，支援を必要とする幼児への理解が深まり，併せて職員の共通理解に基づいた支援が行われることをとおし，幼児一人一人が共に育ち合うための保育の充実が図られることをねらいとしている。

(2) 保育ガイドの概要

ア 保育ガイドの構成と内容

保育ガイドの構成と内容は，【表4】に示すとおりである。

【表4】保育ガイドの構成と内容

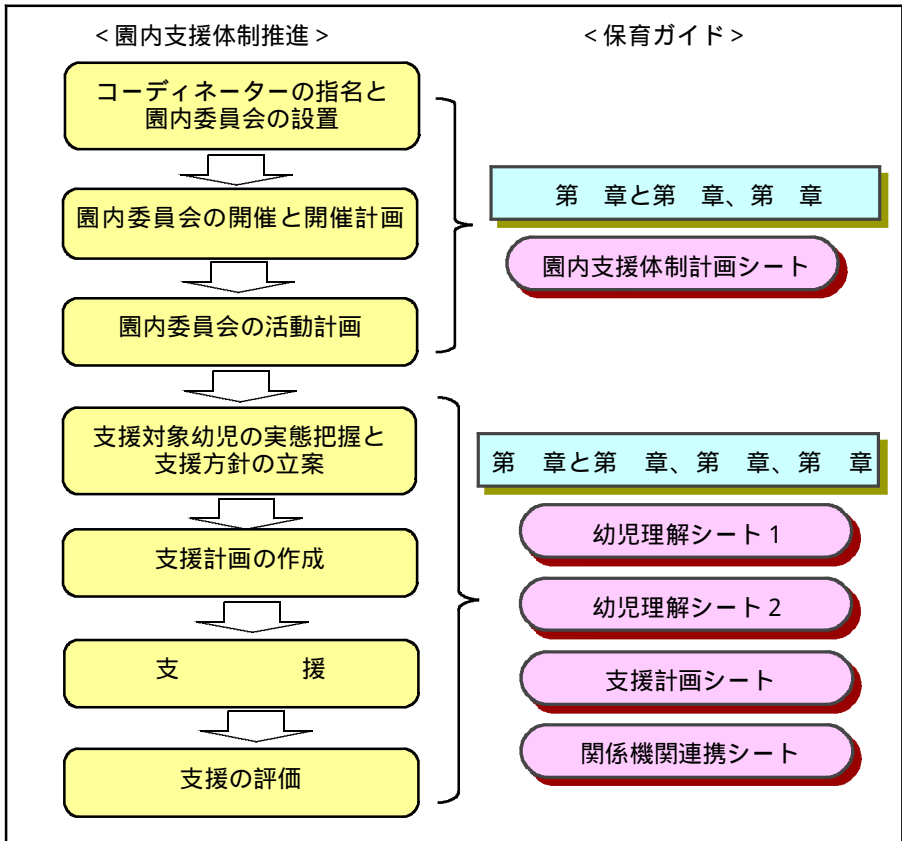
構成	内容	構成	内容
はじめに		第 章	・実態把握と支援計画作成の概要
第 章 園内支援体制をつくるために	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育とは 園内支援体制の概要 園長の役割 特別支援教育コーディネーター 園内支援計画の作成手順 	実態把握から支援計画作成の実際	<ul style="list-style-type: none"> 幼児理解シートを活用した実態把握 支援計画シートを活用した支援計画の作成
第 章 園内支援体制の役割	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握から支援計画へ 研修の推進 保護者との連携 関係機関との連携 	第 章 育ち合いを促す保育のすすめ方	<ul style="list-style-type: none"> 育ち合いを促す保育をすすめるために 支援を必要とする幼児へのかかわり方
		第 章 保育事例	・保育事例
		資料集	・各シート

イ 園内支援体制の推進と保育ガイドのかかわり

園内支援体制の推進の流れと保育ガイドのかかわりの概要について【図2】に示す。

第 章と第 章では、園内支援体制の基本的考え方と推進するための具体的内容を示した。併せて、計画的に推進するための「園内支援体制計画シート」を作成した。

幼児への支援を展開するために、第 章と第 章、第 章に実態把握や支援計画の立案の仕方、支援の具体的な内容を示した。幼児の実態把握と支援計画立案のために「幼児理解シート



【図2】園内支援体制推進と保育ガイドのかかわり

1・2」「支援計画シート」等を作成した。

ウ 各シートの概要

園内支援体制の構築と推進を行うための「園内支援体制計画シート」を次ページ【図3】に示した。「園内支援体制計画シート」は、コーディネーターが作成し、園内委員会で共通理解を図り、園内委員会等の活動を計画的に推進していく。また、全ての項目を網羅して推進するのではなく、幼稚園の実情を考慮し、現在必要とされる項目について取り組むことを想定した。

幼児の実態把握と支援方針の設定、支援計画を作成するための「幼児理解シート1（プロフィール）」(【図4】)、「幼児理解シート2（理解・支援方針）」(【図5】)、「支援計画シート」(【図6】)を次のページ以降に示す。

「幼児理解シート1（プロフィール）」は、幼児の生育歴や支援の参考になる情報を整理するのに用い、幼児が医療機関や教育相談を受診した結果等を随時記入することとした。

「幼児理解シート2（理解・支援方針）」は、幼児の支援方針を決めるためのものである。支援方針を立案するためには、幼児の実態と学級の状況、保護者の願いを具体的に把握する必要があると考えた。幼児の実態欄の項目は、【図5】で示したように、保育の実際場面に即して実態把握できる項目とした。併せて、学級の幼児とのかかわりの中での保育が大切となることから学級の実態を把握する項目を設定した。また、変化の大きい幼児期の特性を考慮し、幼稚園の長期の指導計画作成の時期に合わせて、支援方針を見直すこととした。

「支援計画シート」は、支援のための具体的な目標と支援方法を立案し、支援とその結果を評価するために用い、幼児にかかわる職員が話し合いの中で作成することで、幼児の実態や支援方法についての共通理解を図ることができると考えた。

「園内支援体制計画シート」記入例 (〇〇幼稚園)

園内支援体制計画シート

園名(〇〇幼稚園)
実施開始時期の目安

内容	実施開始時期の目安	備考
I 園内体制作り 1 特別な支援を必要とする子どもの対応について話し合いを行うための組織(以下、園内委員会と呼称)作り 内容 ・園内委員会の編成 ・園内委員会開催についての計画化 2 園内における特別な支援を必要とする児童の確定 内容 ・調査紙を使った全園児童の実態把握 ・園内委員会での支援対象児童の決定 3 コーディネーターの指名と役割の再確認 内容 ・コーディネーターの指名 ・園内委員会内での役割分担とコーディネーターの役割の確認 4 園内委員会での対象児童の状況の把握と指導についての検討 内容 ・園内委員会の開催 ・対象児童の現状の把握 ・支援についての検討	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月	前年度中に組織・計画化する。 ◎ 実践するまでの見通しをもちやすくするために次のようにした ○ 取組の準備、検討の開始を行う ◎ 実際の実行を行う
II 指導の充実 1 対象の幼児の支援計画の立案 内容 ・対象幼児の課題の整理 ・活動面、行動面等の指導計画の作成 2 支援計画に沿った実践 内容 ・活動面の支援 ・行動面の支援 3 対象幼児の支援についての検討 内容 ・課題、内容、方法等の検討 ・支援の評価と新たな取組の検討	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月	
III 研修の充実 1 特別支援教育にかかわる研修会の実施 内容 ・研修会の企画 ・研修会の実施 2 特別支援教育にかかわる日常的な情報提供 内容 ・情報提供を行う担当者的人選 ・情報の提供	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月	
IV 理解啓発活動 1 保護者に対して特別な支援を必要とする幼児への理解啓発 内容 ・理解啓発方法の検討 ・理解啓発活動の実施 2 特別な支援を必要とする幼児の保護者を対象とした教育相談の計画と実施 内容 ・教育相談体制(人、場所、時間等)の検討、計画 ・教育相談活動の周知 ・教育相談活動の実施	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3月	時期は決める必要に応じて行う

【図3】「園内支援体制計画シート」(記入例)

「幼児理解シート1(プロフィール)」記入例

記入年月日: H20年 5月15日(木)

ふりがな 氏名	いわて けんた 岩手 県太 (男・女)
生年月日(年齢)	平成15年 8月12日 (4歳 9月)
保護者氏名	いわて けんたろう 岩手 県太郎
所属	たんぼ組 (4歳児学級)
担任名	湯口 花子
家庭の状況 (家族構成等)	祖母,父(会社員,夜間勤務がある),母(主婦),兄(小学校1年)
入園前の様子 (発達状況, 体験入園等)	首のすわり:3か月,始歩:2歳 体験入園:好きなこと(電車をならべる)は,時間を忘れて遊んでいた。話しかけても聞いていないように思われた 教育相談、医療機関を受診した結果について随時記入する
今までに受けた相談等の記録 (健診,治療,療育相談,検査等)	3歳児健診(ことばについて相談する。様子を見るように言われる) 巡回相談(市教育委員会)を受ける(6月9日) ・H20.6.9実施「乳幼児発達検査(津守式)」 ・本児が達成可能な目標の設定と具体的な達成基準を設定した方がよいこと、一つずつ具体的に指示を出すこと等をアドバイスされる

【図4】「幼児理解シート1(プロフィール)」(記入例)

「幼児理解シート2（理解・支援方針）」記入例

記入年月日 H20年 5月15日（木）
 (○：長所 △：困難さ・課題)

幼児の実態	生活 (着脱、食事、排泄、生活リズム等)	所持品の始末や着替えは自分でできるようになってきた。しかし、日によってムラがあり、援助が必要である
	遊び (遊び方、動き、注意集中、興味関心等)	絵を描く一人で即して、実態把握できる項目とした
	人間関係 (教師・学級・他児との関係等)	担任や支援員の先生とかかわりがとれるようになってきた 大人や周りの幼児から働きかけないと一人で居ることが多く、話しかけても知らん顔をしている
	ことば (感情・要求の表現・意欲・態度、ことばの理解、発音・発声等)	発音がはっきりしてきた 教師が指示したことを理解できないことが多く、行動に結び付かない 自分が言いたいことをうまく言葉にできないことが多い
	その他 (身体・健康、安全、情緒等)	昨年度は、欠席がなかった 教室からの飛び出しが多い 何か
保護者	養育や連携の状況等	母親に大切にされることから学級の実態を把握できる項目を設定した
	保護者の願い	落ち着いて遊べるようになってほしい
学級の実態	学級の様子	※学級の状態を表す数字に○を付けます 1. とても思う 2. 少し思う 3. あまり思わない 4. まったく思わない ①落ち着いている ②まとまりがある ③トラブルが少ない ④活気がある ⑤子ども同士のかかわり合いが多い ⑥保護者は協力的である
	本児との関係	1年経過したことで自分たちから声をかけたり、かかわり合ったりする場面も増えてきた。しかし、本児がパニック状態になるとどのようにかかわっていいかわからずとまどう様子が見える
	課題と感じていること	パニック状態にならないように、本児の思いどおりになるように対応しがちであり、他の幼児は、本児を特別扱いしていると感じている
支援方針	本児と学級への支援	・本児は、ことばの理解や見通しをもつことに困難を感じていると考えられ、視覚的支援(絵カード等)を使ったり、他児の行動を見て真似させたりする ・他の子ども達にも絵カードを使って説明する
	担任支援	・パニック状態の時には、安全面への配慮が必要であることから、園長や教頭に連絡を取り、対応してもらえる体制をつくる
	保護者支援	・一日の流れに沿った生活ができるように、家庭で利用できる日課表を作り、利用してもらう

【図5】「幼児理解シート2（理解・支援方針）」（記入例）

「支援計画シート」記入例

H20年 5月15日（木）

○支援目標の設定

【課題の焦点化】

「幼児理解シート2」の項目で△印が付いた困難さや課題の中から次の観点で課題の焦点化を行います。
 焦点化の観点をチェックします。

達成可能 緊急性 ニーズ 二次的な障がい

【支援目標】

関連する項目を○で囲むく 生活・遊び・人間関係・ことば・その他・学級 >

<支援期間の目安：1か月（5月19日～6月20日）>
 指示に従い外遊びから保育室に入ることができる(5日間連続)

具体的に支援者等の動きを共通理解できるようにします

○支援方法の設定

主な支援者と役割分担	主な支援場面
担任：学級の幼児への声がけや指導を担当 支援員：本児の支援は、支援員が主に担当	自由遊び場面

具体的支援方法・内容

- 朝に絵カードを使い今日の日程について確認する
- 遊びの始まりと終わりの合図を決めておき、合図をしたらやめるように約束しておく
- 遊びの終了の合図をして、朝に使った絵カードを見せ、次の活動を知らせる
- 保育室に入ったら、ほめる
保育室での活動は、本児の得意な活動を取り入

幼児の支援に対する評価

- ・有効だった支援について蓄積する
- ・支援方針・計画等の修正に活用する

○支援の評価

評価 H20年 6月 20日（金）

【幼児の様子】：2週目から徐々に保育室にスムーズに移動できるようになってきたが、今週初めて5日間連続で目標を達成することができた。また、保育室でも落ち着いて活動に取り組むことができた。

【支援の有効性】：カードを使って指示や次の活動を伝え、見通しをもたせる取組は有効であった。次の活動に移ることがスムーズになっただけでなく、保育室で落ち着いて座っていられるようになってきた。

【次の課題】：絵カードを使い自分から要求を表現することができる。

【図6】「支援計画シート」（記入例）

2 保育ガイドを活用した園内支援体制推進計画の構想と検証計画

(1) 保育ガイドを活用した園内支援体制推進計画

研究協力園における園内支援体制推進計画を【表5】に示す。

【表5】研究協力園における推進計画

	園長(副園長)	コーディネーター	園内委員会	担任等	研究ガイドの活用
3月	研究概要の理解	研究概要の理解			
4月	上旬 園内経営方針策定 コーディネーターの指名 園内委員会の設置 園内分掌への位置付け 第1回検討会(職員会議)・ 全教職員への説明	教職員の意識調査の実施 (センター担当者からの 依頼) 研究概要の理解		研究概要の理解	「保育ガイド(第 1次案)」の提 案
	下旬	園内委員会の開催 ・メンバー確認 ・推進内容の確認 ・推進計画の作成 コーディネーター機能の分担案作成 「園内支援体制計画化シ ート」の作成	園内委員会の開催 ・メンバー確認 ・推進内容の確認 ・推進計画の作成 ・コーディネーター機能の分担 「園内支援体制計画化シ ート」の作成	園内委員会への出席	
5月	上旬 「保育ガイド(第1次案)」 に基づいた日常的な推進	支援を必要とする幼児の 実態把握にかかわる方策 等	園内委員会 ・メンバー確認 ・対象となる幼児の把握	対象となる幼児の把握 ・担任等の気付きによる支 援を必要とする幼児の実 態把握	
	下旬 第2回検討会				
6月	上旬	保育の状況把握・園内の 連絡調整 必要に応じて園内委員会 での協議を設定	園内委員会 ・支援を必要とする幼児の 判断 ・支援方針等協議 必要に応じて開催	支援計画の作成 ・園内委員会での協議を基 に作成	指導上の課題 の整理 「幼児理解シート 2」による支 援方針の設定 指導方法の選 択・構想(「支 援計画シート」に 記入) 指導の取組と 記録 (週案に記録)
	下旬			支援を必要とする幼児へ の保育実践 ・支援計画に基づく保育	
7月	上旬	園内委員会の開催	園内委員会 ・取組状況の把握 ・今後の方向性の確認 必要に応じて開催	園内委員会との連携 ・保育の実践と評価	取組の評価「支 援計画シート」に 記入)
	下旬 第3回検討会	取組の状況把握・園内の 連絡調整 (必要に応じて園内委員会 での協議を設定)			
8月	上旬			園内委員会との連携 (必要に応じて園内委員 会での協議を設定)	指導方法の選 択・構想
	下旬				指導の取組 (週案に記録)
9月	上旬 下旬 第4回検討会				取組の評価 (「支援計画シ ート」に記入)
10月	上旬	教職員の意識調査の実施 (センター担当者からの 依頼)	園内委員会 ・取組の評価	園内委員会 ・取組の評価	
	下旬 第5回検討会				
随時	・各組織のスムーズな推進の ためのマネジメント	・園内委員会の開催と推進 ・園内・園外の組織との連絡調整 ・保育の進捗状況の把握 ・園内研修会の実施 ・情報の共有化		・コーディネーターとの連携 ・進捗状況の報告 ・保護者との連携促進 ・情報の共有化(提供等)	・職員によるミ ーティング(支 援方法等の検 討と評価) ・ミーティング の状況を記録

(2) 検証計画

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
・保育ガイドの有効性	・園内の体制・組織づくりの推進 ・具体的実践の推進 ・保育ガイドの活用及び改善・修正	・観察法 ・面接法	・実践中の観察と職員への面接をと おして、園内支援体制の構築、支 援の状況から手だての有効性につ いて分析・考察する。
・園内支援体制への意識の 変容	・園内支援体制の理解 ・幼児への支援の理解	・質問紙法	・事前・事後に調査し、意識の変容 を分析・考察する。

3 指導実践及び実践結果の分析と考察

(1) 研究協力園の概要

研究協力園 2 園は、規模等の実態が異なり、それぞれの実態に応じて園内支援体制の構築を行
った。2 園の実態と取組の経過を比較、参照できるように並記することとする。研究協力園の取
組前の概要は、次のとおりである。

研究協力園の概要

	A 園	B 園
学級数 園児数	3 歳児 1 学級 12名 4 歳児 1 学級 14名 5 歳児 1 学級 22名 園全体 3 学級 48名	満 4 歳児 5月より入園予定（「3 歳児」 と同じだが満 4 歳になった時点で随時入園） 4 歳児 1 学級 13名 5 歳児 1 学級 7 名 園全体 2 学級 20名
職員数 職員構成	7 名 園長，主任教諭，教諭，講師 2 名 養護教諭（兼務のため小学校にいる）， 用務員	4 名 園長，主任教諭，副主任教諭， 講師（支援員として 20 年度より）
支援を必要と する幼児の在籍	3 歳児 1 名 言葉，発達の遅れ （疑い） 4 歳児 1 名 情緒不安定（疑い） 5 歳児 2 名 社会性，理解（疑い） 5 歳児 1 名 発達の遅れ （6 月に転入する）	4 歳児 2 名 先天性の障がい有 発達の遅れ（疑い） 5 歳児 1 名 情緒不安定（疑い） （8 月に入園）
特別支援教育 園内委員会	19 年度までは，なし	19 年度までは，なし
コーディネータ ー	19 年度までは，なし	19 年度までは，なし
支援について の取組	・保育後や週案の検討時に話し合う	・保育後や週案の検討時に話し合う
支援を必要と する幼児の対応	・全員で保育に当たるようにしてい るが，個別の対応は園長がしている	・朝の打合せ時に確認し，全員で保育 に当たるようにしている

(2) 推進計画に基づく指導実践及び分析と考察

次に，推進計画に基づき，保育ガイドを活用して行った指導実践の概要を示す。指導実践 2・
3・5 は，保育実践の後に，検討会を行ったものである。各指導実践の概要と合わせて，成果と
課題，保育ガイドの活用状況と改善点について示すこととする。

指導実践 1 (第 1 回 検討会)

A 園	B 園
<p>第 1 回園内委員会 日時：4月11日（金）15：00～17：00</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>目的・新メンバーで研究の概要の理解 ・園内支援体制づくり（園の方針・園内委員会・コーディネーター・年間計画）</p> </div> <p>1 園の運営方針（抜粋） 一人一人の育ちをとらえ、発達に必要な経験を積み重ねていくことを指導の重点にあげる</p> <p>2 園内委員会の位置付け ・経験の少ない教諭と講師が3名いることから、園内委員会として新設し、保育指導の充実を図る研究会としたい ・メンバーは、保育にかかわる教職員5名とし、養護教諭（小学校と兼任のため不在のことが多い）と用務員を除く</p> <p>3 コーディネーター 主任教諭が担当（教務主任・研究主任を兼任）し、指導計画と保育の関連を重視して、日々の保育実践に生かしていく</p> <p>4 年間計画 ・園内体制計画シート（ガイドのシート活用）</p>	<p>第 1 回園内委員会 日時：4月18日（金）15：00～17：00</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>目的・新メンバーで研究の概要の理解 ・園内支援体制づくり（園の方針・園内委員会・コーディネーター・年間計画）</p> </div> <p>1 園の運営方針（抜粋） 運営方針の中に「なかよしサポート（個別指導支援）」と位置付け、具体的な内容として ・支援を必要とする子どもに開かれた幼稚園 ・個に応じた支援，一人一人を生かした学級経営 ・チーム保育 以上をあげている</p> <p>2 園内委員会の位置付け ・職員会議の中に位置付け，全職員で協議し共通理解を図る ・メンバーは支援員を含め全職員4名とする</p> <p>3 コーディネーター 主任教諭が担当（教務主任を兼任）。指導計画等と関連させながら，副主任（研究主任を兼務）をサポートして，幼稚園全体の取組とする</p> <p>4 年間計画 ・園内体制計画シート（ガイドのシート活用） ・園内委員会年間計画の提案と確認（記入例を参考にして作成）</p>

考 察 成果（ ） 課題（ ） ガイドの活用状況と改善点（ ）

異動により，職員体制が変わったことや，新入園児の実態がまだ把握できていないことへの不安が感じられたが，幼稚園全体で園内支援体制をつくり取り組むことや，その目標や方向性について共通理解がなされ，前向きな姿勢が感じられた。

園内委員会やコーディネーター等の言葉を知っていても，目的や役割や分担の仕方等をよく理解していなかったため，ガイドを見ながら園内支援体制づくりが進められていた。

主任教諭は，今までも教務主任として園内の特別支援教育を推進していたと思われるが，コーディネーターとして指名されたことにより園内委員会の計画や運営を積極的に推進していた。

推進計画より，早く園内支援体制づくりが進められていたのは，必要感からである。実態のわからない幼児を受け入れ，保育を始めなければならないことから，受け入れ体制づくりは，前年度末から行い，4月に新メンバーで確認し，動き出すことが必要である。

園内支援体制づくりは，ガイドを基に行われており，体制づくりの手順や内容がわかりやすく示されていることが大切である。わかりやすい表現の工夫が必要である。

園内体制計画シートは，何月に行うかを記入しにくかったようである。幼稚園としては，一年間を通じて取り組んでいる意識があり，何月に行うかを決められず，備考の欄への記入が多かった。しかし，意図的・計画的に進めていくには，記入することで計画が立ち実現につながる。今の時点で決めかねることは備考の欄に記入できるように，備考の欄を大きくすることが必要である。

指導実践2（第2回検討会）

A 園	B 園
<p>保育実践 日時 4月22日（火）9：00～10：30</p> <p>目的 入園・進級まもない時期の園内体制づくり（登園時・園庭での自由な遊び場面）</p> <p>園内体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園長が登園してきた幼児を玄関で受け入れる ・担任は、保育室で幼児を受け入れ、全員の所持品の始末が終わってから園庭に出る ・3歳児には、担任の他に補助の教師が付き幼児一人一人に対応する ・教師は、園庭に分散して幼児の安全に配慮する（用務員も園庭で作業しながら見守る） <p>幼児の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入園間もない時期であるが、泣いたり不安定になったりする幼児はいない ・園庭で、どの年齢幼児も混じり合っ、固定遊具や砂場で自分の好きな遊びを楽しんでいる ・3・4歳児は、遊びが続かず転々としている ・どの幼児もじっくり遊んでいる状態ではなく、支援の必要な幼児もあまり目立たない 	<p>保育実践 日時 5月2日（金）9：00～10：30</p> <p>目的 入園・進級まもない時期の園内体制づくり（登園時・園庭での自由な遊び場面）</p> <p>園内体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園長が登園してきた幼児を玄関で受け入れる ・担任は、登園を済る幼児への対応をしたり、随時登園してきた幼児の所持品の始末の指導をしたり、園庭での遊びにかかわったりするため保育室と園庭を行ったり来たりする ・支援員は、支援を必要とする幼児に付ききりがかかわる <p>幼児の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援を必要とする幼児が門より飛び出し、支援員が追いかけて、他の幼児も動揺しがちである ・5歳児の遊びを4歳児がまねて、砂遊びやアクリ探しに集まり4・5歳児が混じり合っ遊んでいる ・ウサギ等の小動物とかかわることも幼児の気持ちの安定につながっている
<p>第2回園内委員会 日時：5月16日（金）15：00～17：00</p>	<p>第2回園内委員会（職員会議） 日時：5月27日（火）15：00～17：00</p>
<p>目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内支援体制づくり（研修・保護者との連携） ・気になる幼児の実態把握 ・支援方針と園内支援体制の確認 	<p>目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内支援体制づくり（研修・保護者との連携） ・気になる幼児の実態把握 ・支援方針と園内支援体制の確認
<p>1 園内支援体制づくり（追加分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修の充実を図り、夏季・冬季休業中に学級一人一人の育ちを評価する ・保護者との連携は、担任を基本とするが対応が難しい場合にはコーディネーターや園長が対応 <p>2 気になる幼児の実態把握（幼児理解シート） A児（3歳児）B児（4歳児） C児（5歳児）D児（5歳児）</p> <p>3 気になる幼児の支援方針（幼児理解シート）と園内支援体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児と担任の信頼関係をつくることを心がけ、幼児の気持ちの安定を図る ・自由な遊びの場面では安全に配慮しながら遊び方を教え、じっくり遊べるようにしていく 	<p>1 園内支援体制づくり（追加分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育後の反省会で教師の連携について話し合い指導の充実を図る ・毎月、療育会議に参加し、研修の充実を図る ・保護者や関係機関との連携は随時対応 <p>2 気になる幼児の実態把握と支援方針 P児（4歳児、幼児理解シート・支援計画シート・関係機関連携シート・教育相談記録） Q児（4歳児、幼児理解シート・教育相談記録）</p> <p>3 支援計画を具体化するための園内支援体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援の必要な幼児の安全面を重視し、園生活の仕方がわかるまでは支援員が付き、支援の必要な幼児と周りの幼児の安定を図る ・園長が、登降園時にP児の母親や祖母と話し、悩みを聞くことで家庭との連携が図られてきた

考 察 成果（ ） 課題（ ） ガイドの活用状況と改善点（ ）

前回の園内支援体制に指導や研修の充実、保護者や関係機関との連携の推進等が加えられ充実した。園内支援体制の機能として研修の充実や連携の推進が示されていたことで、具体的な計画が加えられた。幼児理解シートに実際に記入することで幼児の実態を捉える機会となり、課題が見えてきていた。A園では担任が記入し、B園では担任と支援員が別々に記入し話し合いによりシートを作成していた。両者の実態の捉えには共通点と相違点があり、担任が一人で記入するより幼児理解が深まった。どの幼児にも援助が必要な時期であり、実態を把握することの難しさが話題になった。

幼児理解シートの幼児の実態の中で記入しにくい項目があり、修正が必要である（情緒面、生活面）幼児理解シートの学級の実態を捉える欄について、視点があることで記入しやすくなったことで、学級と対象幼児との関係について振り返る機会となり、評価の仕方を新鮮に受け止めていた。

支援方針の欄は誰がいつ記入するのかガイドの中にわかりやすく示すことが必要である。

P児は、明日の保育のため緊急に支援方針が必要であり、支援計画シートと関係機関連携シートへ記入し、共通理解も図られていた。

支援計画シートは、長期的な目標を記入してからの方が計画を立てやすく、その方が目標を共通理解できる。評価の時期と具体的内容がわかりにくいので、記入例をもっと具体的に示した方がよい。実態や支援方針が見えてきたことで、具体的な支援内容を短期の指導計画に盛り込む工夫が両園で行われていた。

指導実践3 (第3回検討会)

A 園	B 園
<p>保育実践 日時 6月17日(火) 8:30~10:30</p> <p>目的 支援を必要とする幼児と周りの幼児の育ち合いを意識した指導(登園時・保育室とホールでの自由な遊びの場面)</p> <p>園内体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園長が幼児を玄関で受け入れ保護者にも対応する ・担任は、保育室で幼児の所持品の始末の援助をしながら遊びにかかわる ・3歳児の支援を必要とするA児には、補助教師が主にかかわり、担任は周りの幼児にかかわる ・5歳児学級に転入してきたE児は、気になる様子が見られるため、担任ができるだけかかわり、園長が補助をする <p>幼児の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任や幼児同士の信頼関係ができてきて、担任や同年齢の幼児同士で遊ぶようになった ・年齢ごとに遊びが展開され、かかわり合いも多くなったことでぶつかり合いも多くなった ・E児へ、周りの幼児は進んでかかわり、所持品の始末などをやってあげている ・3・4歳児の支援を必要とする幼児は、園生活の仕方が分かり流れに沿って生活できるようになってきていた 	<p>保育実践 日時 6月12日(木) 9:00~10:30</p> <p>目的 支援を必要とする幼児と周りの幼児の育ち合いを意識した指導(登園時・園庭での自由な遊びの場面)</p> <p>園内体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園長が幼児を玄関で受け入れ保護者にも対応する ・支援員が4・5歳児の保育室で幼児を受け入れ所持品の始末を指導する ・担任二人は、園庭に居て支援を必要とする幼児を受け入れ(毎朝ブランコに乗るため)、保育室の支援員に引き継ぎ、他の身支度の終わった幼児と園庭で遊びにかかわる ・支援員は、支援を必要とする幼児が身支度を終えてから、園庭に出て周りの幼児ともかかわる <p>幼児の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援を必要とする幼児は、園生活の仕方がだいぶ分かり、危ない行動はあまり見られなくなった ・4・5歳児と一緒に二人の担任にかかわってもらい固定遊具や砂遊び、泥遊び等を楽しんでいる。その様子に、支援を必要とする幼児が関心を示したときには、担任や支援員と一緒にいる。
<p>第3回園内委員会 日時: 7月23日(水) 15:00~17:00</p> <p>目的 ・支援計画評価と次の支援計画の方向性 ・園内支援体制の変更</p> <p>1 支援計画の評価と次の支援計画 (支援計画シートの評価 幼児理解シートで実態把握と支援方針 支援計画シート) A児(3歳児) B児(4歳児) C児(5歳児) D児(5歳児)</p> <p>2 E児の実態把握と支援方針(幼児理解シート)</p> <p>3 園内支援体制の変更 転入したE児への支援と園全体の職員の分担や役割変更</p> <p>4 指導計画への具体化 短期の指導計画に支援計画を具体的に入れる</p>	<p>第3回園内委員会(職員会議) 日時: 7月25日(金) 9:00~11:00</p> <p>目的 ・園内支援体制の一学期の評価 ・二学期の支援の方向性</p> <p>1 一学期の評価と二学期に向けての支援の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4歳児担任(研究主任)より「P児を支える園内支援体制と教師間連携について」の提案 ・一学期の実践を振り返り成果と課題について共通理解をする ・役割分担は、前週の省察をもとに、今週の指導の方向やTTの連携を週初めに打ち合わせをする <p>2 支援経過記録の作成</p> <p>3 支援計画の具体化</p> <ul style="list-style-type: none"> P児 個別の支援計画を作成し毎日の保育計画で担任と支援員がそれぞれ評価し話し合う Q児 学級の活動と一緒に参加できるようになったので学級の短期指導計画に盛り込む

考察 成果() 課題() ガイドの活用状況と改善点()

幼児の実態が共通理解できていることから、支援の必要な幼児と周りの幼児両方に目を配り、指導や援助ができるような園内体制の工夫がそれぞれの園の実態に応じて行われていた。

A園では、転入してきたE児が支援を必要とする幼児と思われるため、急遽、実態把握と支援体制の変更が必要となった。園全体として受け入れ、支援体制ができていたことで、園全体の実態をふまえ、限られた職員数の中で園長が補助しながら保育をすることとなった。

B園では、園内支援体制の取組を、園の研究、計画、評価、記録に組み込み保育全体に生かす姿勢が見られた。また、支援経過記録を独自で作成し今後生かす工夫をしている。

両園で支援を必要とする幼児と周りの幼児のかかわり合いの課題が出され話し合われた。園生活に慣れてきたことで安心して自分を発揮し周りの友達にも関心が出てきた成長の姿であることを確認した。支援を必要とする幼児の話し方をまねたり、仲間に入れなかったり、ルールが守れず「また ちゃんか」と思われていること等である。その場面をとらえて、お互いに育ち合う機会になるように指導の工夫が必要であることが話し合われた。

上記の課題点は、幼児理解シートの中の対象児と周りの幼児との関係を記入することでとらえることができた。かかわり合いの課題をとらえることが育ち合いを促す指導につながる。

トラブル場面が幼児同士の育ち合いの大切な機会であることから、ガイドの中にトラブル場面での教師の対応の仕方についてもっと詳しく載せる必要がある。

幼児理解シートで明らかになった幼児の課題の中から目標を焦点化して支援計画シートにつなげることが難しいようである。達成できそうな目標に焦点化して取り組むメリットをガイドに示す必要がある。

指導実践 4 (第 4 回 検討会)

A 園	B 園
<p>第 4 回園内委員会 (夏休み中) 日時：8月20日 (水) 10:00～12:00</p> <p style="background-color: #f8d7da; padding: 5px;">目的 ・二学期の支援計画 ・園内支援体制の変更と確認</p> <p>1 支援計画の共通理解 (幼児理解シート 支援計画シート) A 児について ・実態がわかるにつれて課題が多くなり何を支援目標にして良いか決めがたい ・排泄への取り組みは、家庭で夏休み中うまくいかなかったらしい ・生活習慣の中で、実現可能な課題を支援目標とし、自信や意欲をもたせていく E 児について ・5歳児であり、小学校入学も見据えて支援計画を立てる必要がある ・まだ、所持品の始末等が身に付いていないので実現可能な目標から取り組む必要がある ・周りの幼児のE児へのかかわり方を工夫することで、周りの幼児の育ちも期待できるのではないかと</p> <p>2 保育体制の工夫 ・4・5歳児合同(チーム保育)の活動を計画し、支援を必要とする幼児と周りの幼児にも個々に応じた援助ができるようにする ・二学期は、運動的な活動が多くなるため、E児への個別の支援が必要になると思われるので、その日の活動内容によって補助教師と園長が保育補助を行う。</p> <p>3 夏休み中の研修会参加報告</p>	<p>第 4 回園内委員会 (夏休み中の職員会議) 日時：8月19日 (火) 10:00～12:00</p> <p style="background-color: #f8d7da; padding: 5px;">目的 ・二学期の支援計画 ・チーム保育の進め方 ・育ち合いを促していく工夫</p> <p>1 支援計画の共通理解 (幼児理解シート 支援計画シート) P 児について ・場面別に二つの目標を設定 自由遊びの場面...放送機器を勝手に操作しない等のルールを守る 学級での一斉活動の場面...みんなと一緒に入室し、活動に参加する ・支援目標が大きく感じるので、ステップを考えて取り組むことが必要(支援シート、または、短期の指導計画に書くか検討する) ・支援期間の設定4か月は長いだろうか?</p> <p>2 チーム保育における連携について ・短期の指導計画に「協同性の芽生えをはぐくむためのTTの連携」の欄を設け、具体的に記入し、連携を図る</p> <p>3 育ち合いを促していくための工夫 ・周りの幼児の育ちを認めていく ・支援を必要とする幼児への理解があるので小グループの中での支援の工夫をする ・教師のかかわり方がモデルになっている ・幼児同士の方が伝わる場面があるので、幼児同士のかかわりの場面をつくっていく</p> <p>4 家庭との連携</p> <p>5 外部機関との連携</p>

考 察 成果() 課題() ガイドの活用状況と改善点()

一学期の反省をもとに、二学期の支援計画について話し合われた。夏休み中に記録を整理できたことや、指導の振り返りができたことで、二学期の具体的な支援計画が提案された。夏休み中の研修会の報告、家庭や外部機関との連携等について、園内委員会が設けられたことでその中で話題として取り上げられ全員に報告され共通理解が図られた。

家庭との連携について振り返り、担任と園長が役割を分担して行ったことで、家庭の相談相手になりながらアドバイスもでき、よい方向で進められていることが確認された。

A 園では、支援を必要とする幼児が転入園したことで園内支援体制の変更が必要となった。幼児の場合、実態把握ができていないため、前に在園していた幼稚園からの情報が無いこともよくある。転入園した園で実態把握を最初からしなければならぬことも多い。途中入園する幼児への対応も含め、園内支援体制が構築されていることが重要である。

A 園では、コーディネーターの学級に支援を必要とする幼児が転入園し、一人で抱え込む形になった。コーディネーターの負担が大きくなるように園内で支え合うことが必要である。

B 園では、園内支援体制による取り組みが、幼児の成長の姿につながり、そのことが家族に変化をもたらしている。園内委員会は取組の成果を確認し共感し合う場となり、次の目標に向かっていく原動力となっている。

B 園では、必要に応じて外部機関との連携も図られている。

改善した支援計画シートに記入してもらったこととした。支援目標を具体化するために記入することがわかり、あまり悩まずに自分たちが実際の保育につなげて行きやすいような記入の仕方に変わってきている。

担任を補助する教師や支援員の対応の仕方が、幼児同士の育ち合いに大きく影響している。ガイドに補助教師の役割についてももう少し詳しく強調して載せる必要がある。



指導実践5（第5回検討会）

A 園	B 園
<p>保育実践 日時 9月11日（木）10：00～12：00 目的 支援を必要とする幼児と周りの幼児の育ち合いを促すチーム保育（園庭での運動的な活動の場面）</p> <p>園内体制 ・3歳児には、補助の教師がつききりでなくともよい状態になったことから、補助教師は、3・4歳児共通で補助をする ・4・5歳児合同の活動で園長を含め4人の教師でチーム保育を行う。5歳児担任が進行し、4歳児担任は4歳児にかかわり、園長と補助教師は支援を必要とする幼児を中心に個別の援助を行う。</p> <p>幼児の様子 ・4・5歳児合同のチーム対抗のマット取りゲームにどの幼児も喜んで参加していた。 ・5歳児は、経験があるので4歳児に手本を見せ積極的に取り組んでいた。 ・4歳児は、5歳児をまねながら参加し、5歳児担任の指示をよく聞き行動していた。 ・支援が必要な幼児は、他の幼児の動きをまねて動き、園長と補助教師が個別に対応することで一緒に活動する楽しさを感じて参加していた。</p>	<p>保育実践 日時 9月9日（火）10：00～12：00 目的 支援を必要とする幼児と周りの幼児の育ち合いを促すチーム保育（園庭での運動的な活動の場面）</p> <p>園内体制 ・支援員は、支援を必要とする幼児が所持品の始末と片付け等の場面では、個別に支援する。 ・4・5歳児合同の活動で2人の担任と支援員の3人がでチーム保育を行う。2人の担任が幼児の状態に応じて声を掛け合い交代で進行する。 ・支援員は支援の必要な幼児を中心にかかわり、幼児がみんなと一緒に活動する楽しさを感じられるように幼児の気持ちに添って支援する。 ・園長は、満4歳児で入園したばかりで外に出たがらない幼児に対応するため保育室に残る。</p> <p>幼児の様子 ・4・5歳児合同のリレー競走と玉入れの活動にどの幼児も喜んで参加していた。 ・支援を必要とする幼児は、初め保育室にいたが、みんなが楽しく活動している様子を見て一緒に集まり、活動に参加した。順番やルールを守られない場面はあったが、一緒に活動する楽しさを感じて何度も繰り返していた。</p>
<p>第5回園内委員会</p> <p>目的 ・チーム保育の評価 ・育ち合いを促す指導の工夫</p>	<p>第5回園内委員会（職員会議）</p> <p>目的 ・園内支援体制による取組の評価</p>
<p>日時：9月26日（金）15：00～17：00</p> <p>1 ティーム保育の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前もって役割分担し進められた ・初めて参加した4歳児がよく取り組めたのはなぜか（5歳児をまねられる・進行役の指示がわかりやすい・複数の教師が対応でき個々への援助が行き渡る等） ・進行役は、幼児の前からあまり動かずに指導できるように、他の教師の参加の意識や事前準備の改善が必要 <p>2 育ち合いを促す指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・E児への教師の支援の工夫 ・周りの幼児のE児へのかかわり方の意識付け（仲間としての意識付け、教師の対応の仕方をまねる、E児にわかるようなかかわり方等） 	<p>日時：10月15日（金）15：00～17：00</p> <p>P児を支える園内支援体制</p> <ul style="list-style-type: none"> - 運動会を通して心の成長を明らかにし、支援方法を考える - ・体調を崩し欠席しがちなP児の一斉活動への参加のさせ方 計画 ・自由遊びの中で見て楽しむ経験を重視 実践 ・「やってみたい」というタイミングを 実践 どの教師も逃さないで対応 評価 ・楽しいと感じて参加する 評価 ・ルールを守らず「ずるい」と言われる 再計画 ・順番を守ろうとした時に参加できる 再計画 ・パニックになった場合の対処方法を共通理解 実践 ・楽しみにして順番を待つがまんを経験 実践 ・気持ちのコントロールできた姿 評価 ・幼児同士が応援し合い認め合う姿 評価

考察

成果（ ） 課題（ ） ガイドの活用状況と改善点（ ）

両園とも園内支援体制が構築されたことで、園内委員会の内容が、園の方針や幼児と教師の実態に応じて、より良い保育を目指すための内容になってきている。

A園では、チーム保育を行ったことで、学級で担任が一人で指導する活動より、どの幼児にも個別の援助が充実し、活動のねらいが達成できる保育となった。また、進行役の主任教諭の指導を他の教師も見ることができ、若い教師達にとって指導の仕方を学ぶ良い機会となった。

B園では、チーム保育を多く取り入れて行った運動会と周年行事への取組を振り返り、P児と周りの幼児の育ちを確かめ合うと共に園内体制の評価が行われた。職員間で話し合いを重ねてきたことが共通理解となり、瞬時の判断が求められる場面でも対応できるようになったことやP児の成長と実態を家庭に伝える機会となり協力して取り組むことができたことを成果ととらえている。

幼児理解シートと支援計画シートへの記入に慣れ、幼児の実態の変化に応じて活用している。達成できそうな支援目標に焦点化して、それを具体化して取り組む意義が実践をとおして理解されてきた。

指導実践 6 (第 6 回 検討会)

A 園	B 園
<p>第 6 回 園内委員会 日時：11月11日（火）16：00～17：30</p> <p style="background-color: #f8d7da;">目的 ・チーム保育の評価 ・幼児同士の育ち合う姿</p> <p>1 ティーム保育の評価（10月の実践より）</p> <p>3 歳児（学級でのルールのある遊びと製作活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人の教師の立ち位置、役割分担、援助方法の工夫、励ましの声かけにより、A 児もみんなの中で活動し、学級で楽しむ活動になる ・製作活動で A 児の手先の不器用さを補っていくには、自由な遊びの時間に A 児の興味やテンポに合わせて指導していくことも必要である <p>4 歳児（基本的な生活習慣を身に付ける場面）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・B 児の気持ちが安定し、ルールを守って生活するようになったことで、学級全体が落ち着きみんなて活動を楽しめるようになった ・二人の教師が同じ方針で B 児に接し、認めたり注意したりすることの積み重ねが大切である ・保育後に二人の教師で保育を振り返り話し合うことが教師同士の育ち合いになっている <p>5 歳児（支援の必要な活動場面）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・E 児の園内での実態把握と共通理解により個別に支援の必要な場面が明確になったことで、園長や異年齢担当の教師とのチーム保育が可能になり成果があった。 <p>2 幼児同士の育ち合う姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めのうちは、身の回りのことをうまくできない E 児に世話をすることで受け入れようとしていた ・教師の E 児へのかかわり方を見て、E 児を理解し、教師をまねてかかわる幼児が多くなる ・周りの幼児は E 児にやってあげるのではなく、教えて助けてあげようとするなど、幼児同士の支援が見られるようになってきた ・お互いに相手に分かりやすく伝えようとし幼児同士の方が通じ合うことも多くなった ・教師が幼児同士のかかわり方を意識して指導することで育ち合う姿が多く見られるようになった 	<p>第 6 回 園内委員会 日時：10月29日（水）16：00～17：30</p> <p style="background-color: #f8d7da;">目的 ・園内支援体制づくりの評価 ・幼児同士の育ち合う姿</p> <p>1 園内支援体制づくりの評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内での役割がはっきりしたことで、意識して取り組むことができた ・幼児の成長を確認し合い共感できた ・悩みは絶えずあるが、悩みを共有し、明るい兆しの中で取り組むことができた ・コーディネーターの役割を意識し、相談にのりながら担任を支えることができた ・支援員は、個別の支援になりがちであるが、幼児同士の育ち合いを意識しながら、支援を必要とする幼児に支援し、周りの幼児にもかかわることが大切である ・担任と支援員が幼児理解シートと支援計画シートを記入し、話し合いながら共通理解を図り支援できたことが幼児の成長につながった ・幼児理解シートは、進級したり担任が替わったりしたときにも引き継ぎやすく、小学校との連携にも活用していきたい ・学級の評価の仕方を指導計画の作成や保育の評価にも活かすことができた ・教育相談、病院や療育センターとの連携や研修は、さらに必要である <p>2 幼児同士の育ち合う姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・P 児は、集団生活のルールを守ることが難しく、注意をしたことでパニックになることもあったため、周りの幼児への影響を考えながら支援することが多かった ・周りの幼児が教師の支援の仕方をまねることも多かったが、教師と幼児と一緒に相談したり教師が周りの幼児のかかわり方からヒントをもらったりすることもあった ・幼児同士の方が気持ちが通じ合うこともあり、できるだけかかわり合いの機会をつくることで育ち合いにつながっている ・周りの幼児のかかわり方や気持ちを認めていくことも大切である

考 察 成果（ ） 課題（ ） ガイドの活用状況と改善点（ ）

二学期後半になり、園内支援体制による取組の成果が、幼児同士の育ち合う姿として確認された。チーム保育は、支援を必要とする幼児への支援だけではなく、周りの幼児への援助も充実し学級と担任の支援になっている。また、教師同士の幼児理解や指導方法についての学び合いにつながっている。支援の必要な幼児と周りの幼児のかかわり合いで課題が見えてきたときに、教師が幼児同士お互いに理解し合えるように指導したことが育ち合いにつながっている。

支援の必要な幼児自身の課題というところだけではなく、学級としてどのように指導したらよいか考え工夫するようになったことが保育の向上につながっている。

園内委員会での話し合いは、特別支援教育の園内研修会となっている。また、課題や支援方針を確認するだけではなく、幼児や家族の成長を共感する機会となり悩みつつも前向きな取組になっている。幼児の育ち合いには、家庭との連携が大きく影響しており、家庭と幼稚園の信頼関係が大きな支えとなっている。

幼児の成長や変化に伴い、絶えず課題は生じてくる。

A 園では、園内で共通理解できたことを日々の保育の計画へ具体化していくには、指導計画の作成段階から盛り込む必要があり、指導計画の様式の変更も必要であることが話し合われた。幼児期の発達の姿はとらえることが難しいが、シートに書くことで整理し、また幼児をよく見て理解しようとする意識になり、シートに書くことが実態把握や共通理解につながっている。

以上の指導実践及び分析と考察から明らかになったことを保育ガイドの活用にかかわる検証項目に沿って述べる。

ア 園内の体制・組織づくりの推進

保育ガイドを活用した園内支援体制の推進を行うことで、次のことが確認された。

(ア) 園内委員会の設置について

園長がリーダーシップを発揮し、支援を必要とする幼児に対する保育を園の運営方針に位置付けることが行われたこと

園内委員会は、職員数や職員の経験、時間的な制約等の幼稚園の実情に応じて設置することができたこと

園内委員会における協議をとおして、全職員が協力して支援を行うことが意識されるようになったこと

(イ) コーディネーターの指名について

コーディネーターが指名されたことで役割が明確になり、園内委員会の推進や支援体制づくりなどが効果的に行われるようになったこと

「園内支援体制計画シート」を活用し、園内支援にかかわる具体的内容を盛り込んだ年間の計画を立てることで見通しをもった推進が行われたこと

コーディネーターは、学級担任、教務主任を兼任していたが、研究担当が研修関係を推進するなど、園務分掌に合わせて役割分担をすることが推進する上で役だったこと

以上のことから、保育ガイドは、園内の体制・組織づくりを行うために有効だったと考えられる。

イ 園内支援体制に基づく具体的実践の推進

保育ガイドを活用し、園内支援体制に基づく具体的実践を行うことで、次のことが確認された。

(ア) 実態把握について

「幼児理解シート1・2」を記入することで幼児の実態を具体的に捉えることができたこと

「幼児理解シート2」にある学級状況欄を活用し、学級や保護者とのかかわりを捉えることができたこと

「幼児理解シート1・2」と「支援計画シート」に基づいて、進級や就学時に支援を引き継ぐための資料を作成するなど活用の広がりがみられたこと

(イ) 保護者との連携について

保育ガイドを参考に、担任が日常的な対応を行い、園長は保護者の気持ちを受け止めるなど、担任と園長が役割分担して行ったことが、保護者に幼稚園への信頼感や安心感をもたせることにつながったこと

(ウ) 関係機関との連携について

「関係機関連携シート」を活用することで、関係機関と連携する時期を考慮することができ、見通しをもつことができたこと

保護者が関係機関との連携に前向きでない場合の対応について保育ガイドに示したことにより、担任の不安を解消できたこと

(エ) 園内研修の充実について

外部の研修会に参加した職員が研修内容について報告を行うことや園内委員会での支援にかかわる話し合いが研修の機会となったこと

実態把握シートを参考に、幼稚園で保育の記録用紙を作成し、支援にかかわった職員同士で

一日の支援について意見交換を行ったことで、指導・支援の質を高めることができたこと

(イ) 支援を必要とする幼児への支援

「支援計画シート」を活用することで、課題の焦点化の必要性に気付き、具体的な支援目標や支援方法等を立案することで、支援の成果に結び付いたこと
保育ガイドの具体的な支援の取組方を参考にして指導の工夫が行われ実際の指導に活用できたこと

(カ) 学級の幼児への支援（一人一人が共に育ち合う指導について）

周りの幼児とのかかわりを意識した指導・支援が行われるようになったこと
担任が適切な支援を意識して周りの幼児に示すことで、支援を必要とする幼児に対する接し方に気付かせ、幼児同士のかかわりや育ち合う姿が見られるようになったこと

以上のことから、保育ガイドは、園内支援体制に基づく具体的実践の推進に有効だったと考えられる。

ウ 保育ガイドの改善・修正の方向性

指導実践から保育ガイドの活用を図るための改善・修正の方向性を次のようにまとめた。

1 表記と様式にかかわること
・幼稚園の職員が必要な箇所をすぐに参考にできるように、さらにポイントを絞った表記にすること
・シートの記入の仕方をさらに分かりやすいものにするために、より具体的な記入例を示すこと
・シートの様式等を記入しやすいように欄を大きくすること
2 内容構成にかかわること
・実践事例等を加え、より分かりやすい内容構成にすること
・幼稚園では、支援を必要とする幼児に対応するために補助教員が入ることが多いことから、補助教員のかかわり方について示すこと

(3) 事前事後調査の分析と考察

ア 調査対象及び調査内容

- ・調査対象 研究協力園（2園）職員 10名
(事前調査で問2～7に回答しなかった2名について、事後調査においても問2～7の集計に加えなかった)
- ・調査期間 4月と10月の2回
- ・調査内容 事前・事後調査内容は【表6】に示すとおりである

【表6】事前・事後調査内容

調査内容	
	貴園に在籍している特別な教育的支援を必要とする幼児の把握状況についてうかがいます。
問1	あなたはどの幼児が該当するか知っていますか。(3つから選択)
問2	あなたはその幼児について、園生活(行動面や生活面等)の中で、問題となっている内容を知っていますか。
問3	あなたはその幼児へのかかわり方、接し方のポイントや配慮事項について、知っていますか。(4つから選択)
問4	あなたはその幼児へ指導を行う際、不安を感じていますか。(評定尺度)
問5	その理由をお書きください。(自由記述)
	貴園に在籍している特別な教育的支援を必要とする幼児の情報収集についてうかがいます。
問6	あなたはその幼児について、日常の園生活(行動面や生活面等)の様子を知る機会は何の程度ありますか。(4つから選択)
問7	あなたはその幼児にかかわる様子や指導経過等の情報をどのような場面・方法で得ていますか。(複数回答可)
	貴園に在籍している特別な教育的支援を必要とする幼児の園内での支援の在り方についてうかがいます。
問8	貴園において、あなたはその幼児に対する支援を行っていく上で、現在どのような取組をしていくことが大切だと考えていますか。特に大切だと思う内容を5つ選び記入してください。(5つ選択)
	その他
問9	特別な教育的支援を必要とする幼児と周りの幼児が共に生活することにかかわって、考えていること、必要に思うこと等を自由にお書き下さい。(自由記述)

イ 調査結果の分析と考察

(F) 支援を必要とする幼児の把握状況

問1の結果は【表7】に示したとおりである。A幼稚園では、事後調査の結果、該当幼児を知っている職員が増えている。また、B幼稚園については、事前と事後調査では変化がみられなかった。

【表7】問1「該当幼児を知っているか」の調査結果

A幼稚園 (n=6)					B幼稚園 (n=4)						
前	後	A	B	C	計	前	後	A	B	C	計
	A	0	0	0	0		A	4	0	0	4
	B	4	0	0	4		B	0	0	0	0
	C	1	1	0	2		C	0	0	0	0
	計	5	1	0	6		計	4	0	0	4

注1) 選択肢は、「A全部知っている」「B一部知っている」「C知らない」である。

問2(【表8】)と問3(【表9】)は、事前・事後調査の結果である。いずれも、変化はみられなかった。

これは、調査の前から支援を必要とする幼児への職員の関心が高かったためと考えられる。しかし、両園ともに園内委員会等の話し合いをみると、支援を必要とする幼児の課題や支援内容について具体的に把握しているとはいえなかった。その後、指導実践を経ることで、「幼児理解シート」の作成や保育後の話し合いをとおして担任と副担任の課題の捉え方の違いに気付いたり、一斉指導場面で支援を必要とする幼児の実態に応じた役割分担を工夫したりするなどの様子がみられるようになった。

【表8】問2「問題の内容を知っているか」の調査結果

A幼稚園 (n=4)				B幼稚園 (n=4)					
前	後	+	-	計	前	後	+	-	計
	+	4	0	4		+	4	0	4
	-	0	0	0		-	0	0	0
	計	4	0	4		計	4	0	4

注) 調査は、A、B、C、Dの四肢選択で行い、AとBをプラス反応(+)とし、C、Dをマイナス反応(-)とした。

これらのことから、支援を必要とする幼児の具体的な課題や支援内容の共通理解が図られたことがうかがわれる。

問3の事前と事後調査で変化がみられなかった職員は、行事以外で幼児と接する機会が少なかったことと情報を得る機会が少なかったからと考えられる。

【表9】問3「配慮事項を知っているか」の調査結果

A幼稚園 (n=4)				B幼稚園 (n=4)					
前	後	+	-	計	前	後	+	-	計
	+	2	0	2		+	4	0	4
	-	1	1	2		-	0	0	0
	計	3	1	4		計	4	0	4

注) 調査は、A、B、C、Dの四肢選択で行い、AとBをプラス反応(+)とし、C、Dをマイナス反応(-)とした。

問4の調査結果を【表10】に示した。事前と事後調査では大きな変化はみられなかった。

【表10】問4「配慮事項を知っているか」の調査結果

A幼稚園 (n=4)				B幼稚園 (n=4)					
前	後	+	-	計	前	後	+	-	計
	+	0	0	0		+	0	0	0
	-	0	4	4		-	2	2	4
	計	0	4	4		計	2	2	4

注) 調査は、A、B、C、Dの四肢選択で行い、AとBをプラス反応(+)とし、C、Dをマイナス反応(-)とした。

しかし、問5の記述から指導への不安を

感じている理由をみると、事前調査では、支援を必要とする幼児の指導にかかわる専門性がないこと、支援に対する園内の共通理解や連携についての不安、安全・健康面への不安等があげられていた。

事後調査では、支援を必要とする幼児の指導にかかわる専門性よりも支援の方法や幼児にとって適切な支援だったか等、支援の具体的な内容に触れている回答が多くみられた。また、「Bどちらかというと感じない」と回答した理由として、「情報交換や意見交換することをおして指導を検討し合うことができ自信につながった」こと等があげられていた。

事前における不安の内容は、支援を必要とする幼児の指導・支援に見通しがもてない状態に対するものであったが、事後では、具体的な支援の取組や評価、さらに適切な支援を行うためにはどうしたらよいかなど、不安に感じていることの内容や意識が変容してきたと捉えることができる。これは、園内委員会等において、支援を必要とする幼児の支援にかかわる情報交換や意見交換をすることによって、指導・支援への見通しがもてるようになったからだと考えられる。

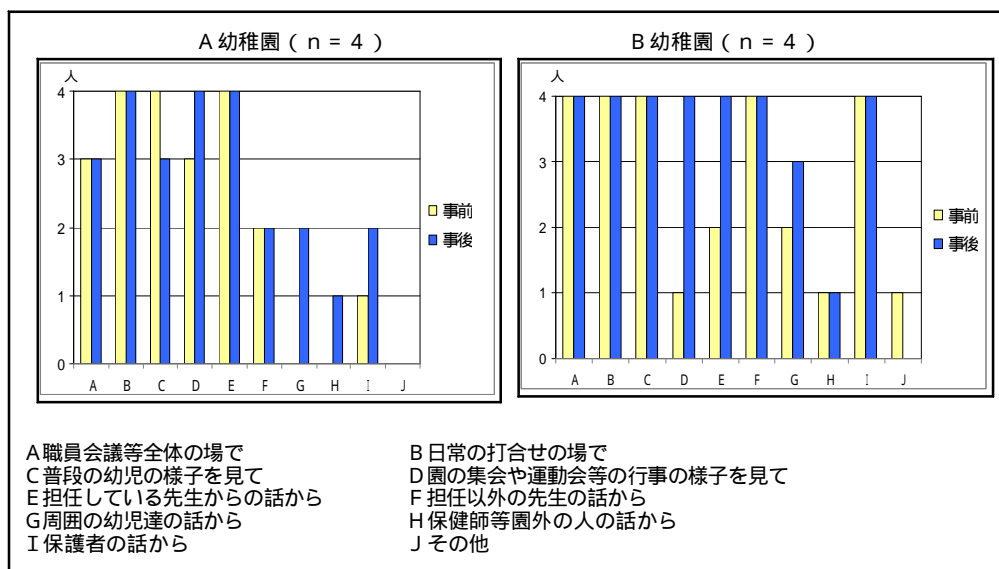
以上のことから、日常的に幼児とのかかわる機会が少ない職員に対しての共通理解を図るための手だてについて課題はあるものの、園内支援体制が整うことで支援を必要とする幼児への具体的な課題や支援内容にかかわる共通理解が図られたと考える。

(1) 支援を必要とする幼児理解のための情報収集について

問6「支援を必要とする幼児の様子を知る機会」の事後調査では、両園ともに「Aかなり多くある」の回答が増えていた。

問7「幼児の様子や指導経過等の情報の収集方法」の調査結果を【図8】に示す。

両幼稚園ともにほとんどの選択項目は同じか増えていることから、支援を必要とする幼児の指導経過を知る



【図8】問7「幼児の様子や指導経過等の情報の収集方法」の調査結果

機会が増え、職員会議や日常行っている打合せ以外に様々な機会を活用し、支援を必要とする幼児の様子を捉えようとしていることが分かる。

各幼稚園についてみると、A幼稚園では、「D園の集会や運動会等の様子を見て」と「G周囲の幼児たちの話から」「H保育士等園外の人話から」「I保護者の話から」が増えた。特に、事後調査で「G周囲の幼児たちの話から」が新たに選択されたのは、支援を必要とする幼児と周りの幼児とのかかわりが増え、職員がそのかかわり合いを捉えて必要な情報を得ることができるようになったためと考えられる。

B幼稚園では、「D園の集会や運動会等の様子を見て」と「E担任している先生からの話」「G周囲の幼児たちの話から」が増えた。特に、「E担任している先生からの話」の項目が事後調査で増えたのは、園内支援体制が整ったことにより、担任が周りの職員に対して幼児や指導について話しやすくなったためと考えられる。

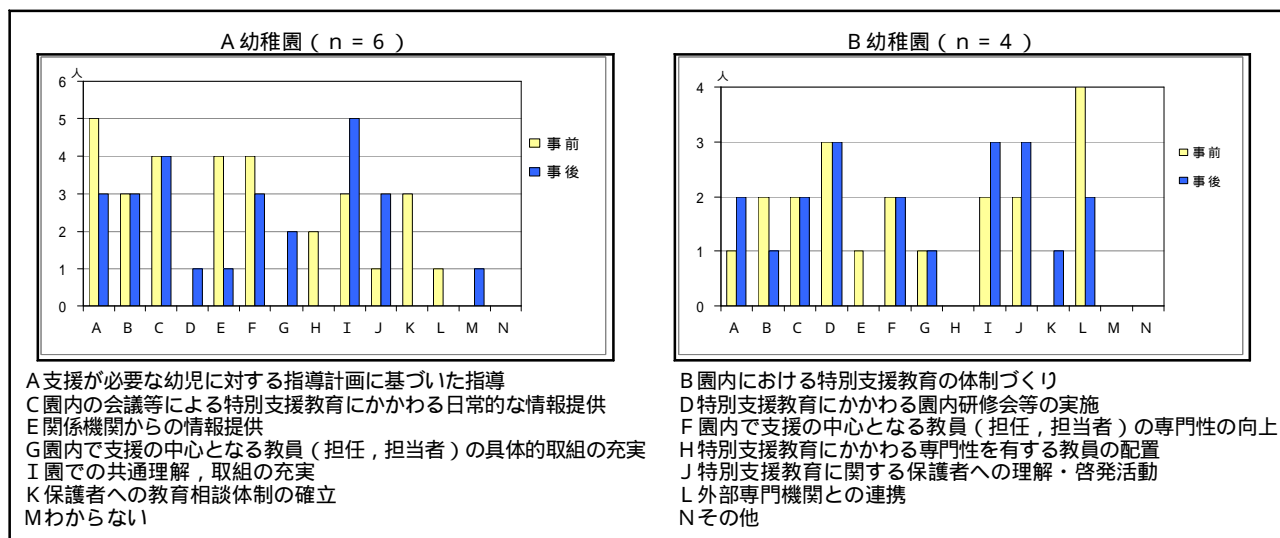
以上のことから、様々な機会を活用して支援を必要とする幼児の状況や支援の状況を具体的に捉えようとしたり、担任だけでなく保育にかかわる職員全体で支援をしようとする意識が高まってきたと考えられる。

(2) 支援を必要とする幼児の園内での支援の在り方について

次ページの【図9】は、問8「現在どのような取組が必要か」の事前・事後調査の結果について

て示したものである。

事後調査において、両幼稚園で共通に増えた項目は、「I園内での共通理解と取組みの充実」と「J特別支援教育に関する保護者への理解・啓発」であった。



【図9】問8「現在どのような取組が大切であるか」の調査結果

「I園内での共通理解と取組みの充実」が増えたのは、支援を必要とする幼児への指導・支援を行うために、園内における幼児の実態や指導にかかわる共通理解と協力によって、具体的な取組みの充実を図る大切さが意識されてきたことを示しているからだと考えられる。

「J特別支援教育に関する保護者への理解・啓発」が増えたのは、支援を必要とする幼児の支援を行うためには、学級の保護者の理解と協力を得ることの必要性が意識されてきたからだと考えられる。

また、事後調査において共通して減った項目は、「E関係機関からの情報提供」と「L外部専門機関との連携」であった。これは、園内支援体制を整えることで支援を必要とする幼児への理解が深まり、支援の見通しをもつことができたこと、併せて、必要に応じて関係機関との連携を行えばよいことが理解されたためだと考えられる。

各幼稚園についてみると、A幼稚園では、「D特別支援教育にかかわる園内研修会等の実施」と「G園内で支援の中心となる教員（担任，担当者）の具体的取組の充実」「Mわからない」が助成調査で増えていた。また、事後調査で減っていた項目は、「A支援が必要な幼児に対する指導計画に基づいた指導」と「H特別支援教育にかかわる専門性を有する教員の配置」「K保護者への教育相談体制の確立」であった。A幼稚園で「G園内で支援の中心になる教員（担任，担当者）の具体的取組の充実」が増えたのは、幼児の支援の中心となるのは担任であり、その指導の充実を図ることが意識されたからだと考えられる。

「A支援が必要な幼児に対する指導計画に基づいた指導」が減っているのは、園内委員会に参加しない職員（用務員）が事後調査では「Mわからない」を選んだためであり、園内委員会に参加しない職員に対する支援が必要な幼児への指導・支援について理解を図る取組みが十分ではなかったからだと考えられる。また、「K保護者への教育相談体制の確立」が減っているのは、保護者への対応を園長と担任が役割分担をして行っており、園内支援体制が整うことで十分に対応できることが分かったことから減少したものと考えられる。

B幼稚園において事後調査で増えた項目は、「A支援が必要な幼児に対する指導計画に基づいた指導」と「K保護者への教育相談体制」であった。また、事後調査で減った項目は、「B園内にお

ける特別支援教育体制づくり」である。いずれの項目も1名の増減であり、大きな変化は見られなかった。「B園内における特別支援教育体制づくり」が減って、「A支援が必要な幼児に対する指導計画に基づいた指導」が増えていたのは、コーディネーターが指名され、園内委員会が定例的に開催されるようになり園内支援体制が整ったことで、支援を必要とする幼児への指導・支援の充実を図ることが求められているからだと考えられる。また、「K保護者への教育相談体制の確立」が増えたのは、支援を必要とする幼児への保護者の理解を図る必要がある事例があるためであり、さらなる園内支援体制の充実が求められているからだと考えられる。

以上のことから幼児の支援の在り方について、園内委員会に参加しない職員への支援が必要な幼児への理解を図る取組に課題はあるものの、園内支援体制と共通理解に基づく支援の充実の必要性が認識されてきたものとする。

(I) 支援を必要とする幼児と周りの幼児が共に生活することについて

問9の事前調査の自由記述では、集団での保育の大切さを述べると共に、「専門的知識を持って丁寧にかかわれる人的環境が必要」「教育的支援を必要とする幼児に丁寧に対応しきれていない」「担任(私自身)がその様子などをどんどん職員間に発信していき、(省略)、日々の指導の方向性を見失わずに接していくこと(省略)」等の記述がみられ、具体的な支援や職員間の連携を図る際にも担任が中心とならなければならないと感じている職員が多かった。

事後の記述では、「(省略)援助の仕方を担任だけでなく、補助の先生や園全体で共通理解し、実行することだと思う」「チーム保育は大切だと思う」「どのお子さん(保護者を含む)に対しても適切な理解と指導ができるよう園内の体制がしっかり作れていることが大切だと思う」等の記述がみられ、園内支援体制を整え、職員が協力して支援を行うことへの認識が高まったと考えられる。また、「教師の専門性に向けた話し合いの充実、専門(関係)機関との連携、保護者と信頼関係などの必要性を実感できたのは成果であり、一步である」との記述があり、園内支援体制の取組が充実していたことがうかがわれた。

周りの幼児とのかかわりに関する事後調査の記述では、「周りの子ども達の育ちもとても大きく、相手の立場に立って考えられるようになった子が、今年は多く見られるようになりました」「担任と支援児、サポート職員とクラスの子ども、園全体の子供とのかかわりが生まれ仲間意識が出てきた」等の感想が書かれており、支援を必要とする幼児だけではなく周りの幼児の育ちを

実感として捉えていた。併せて、「どの子も活かせる集団のあり様の大切さを学びました」「担任自身の日々の保育や学級経営について、改めて考える機会になりました」「その子を取り巻く学級の経営の在り方、その子を同学級の中で発揮できるようにしていくかがとても重要である」と考える」等、集団での生活や学級経営という視点から支援を行い、共に育ち合う指導の充実を図りたいという意識の高まりがみられた。

以上の(A)～(I)で述べてきたことから、園内支援体制の構築と推進をとおして、園内支援体制への理解が深まると共に、幼児の支援の在り方に対する理解が深まったと考えられる。

4 幼児一人一人が共に育ち合う指導に関する手だてのまとめ

本研究では、園内支援体制の構築と園内協力による幼児の支援のための手引きを作成し、それに

基づいた実践を行った。その実践の結果及び事前・事後調査の結果の分析と考察に基づき、その成果と課題についてまとめる。

(1) 成果

- ア 保育ガイドで園内支援体制をつくるための役割や手順、「園内支援体制計画シート」を提示したことにより、各幼稚園のより実情に応じた園内支援体制が構築できた
 - (ア) 園長のリーダーシップが発揮され、園内支援体制の構築が促進された
 - (イ) 園内委員会の設置やコーディネーターの指名など、園内組織に位置付けられたことにより、園内における具体的支援が計画的に推進された
 - (ウ) 支援が必要な幼児への役割が明確となり、組織的な対応と園内協力による支援が可能となった
- イ 保育ガイドで実態把握の方法や育ち合いを促す保育のすすめ方、併せて、「幼児理解シート1・2」等を提示したことにより、具体的な指導・支援が行われた
 - (ア) 「幼児理解シート1・2」の活用により、実態を具体的に把握することができ、支援を必要とする幼児の共通理解を図ることができた
 - (イ) 「支援計画シート」を活用し、課題を焦点化することで支援方法の改善が図られた
 - (ウ) 育ち合いを促す保育のすすめ方を活用することで、具体的な指導や支援の工夫に結びつき、指導の改善がみられた
 - (エ) 園内支援体制が推進されたことで、支援を必要とする幼児への指導・支援が充実すると共に周りの幼児の成長もみられ、一人一人が共に育ち合う姿を確認することができた
- ウ 指導実践等から明らかとなった改善・修正点に基づき保育ガイドの見直しの方向性を示すことができた

(2) 課題

- ア 園の保護者との連携について、実践の期間では具体的な方策を示すことができなかった。園の保護者との連携を図るためには、幼稚園の特別支援教育にかかわる方針を保護者に説明することが大切であり、そのための具体的な方法を示すことが必要である。
 - イ 勤務体制の関係で園内委員会に参加できない職員に対して、指導・支援への共通理解を図るための、打合せの持ち方や支援シートの活用等について具体的に示すことが必要である。
- 以上のことから、いくつかの課題はあるものの、本研究で作成した「支援が必要な幼児の育ち合いを促す保育ガイド」は、幼稚園における園内支援体制の構築と園内支援体制による指導・支援の充実に役立つものである、という見通しをもつことができた。

研究のまとめ

1 研究の成果

この2年間の研究では、1年次に県内国公立幼稚園における実態調査の実施及び基本構想の立案、手だての作成と園内委員会等の設置に向けた取組み、2年次には手だてに基づく指導実践を行い幼児一人一人が共に育ち合う指導について研究を進めてきた。本研究の成果は、次のとおりである。

- (1) 幼稚園における幼児一人一人が共に育ち合う指導の在り方に関する研究の基本構想の立案
これまでの保育に特別支援教育園内体制の組織と機能を付加した園内支援体制に基づく一人一人が共に育ち合う保育を行うための基本的構想を立案することができた。

- (2) 幼稚園における園内支援体制にかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察
実態調査では、県内の国公立幼稚園において、保育の現状と支援を必要とする幼児の保育を行う際の課題を明らかにすることができ、手だてを作成するために活用することができた。
- (3) 幼稚園における園内支援体制の構築及び支援のための手だての作成
基本構想及び実態調査の結果を基に「支援が必要な幼児の育ち合いを促す保育ガイド」を作成することができた。
- (4) 指導実践及び実践結果実践と結果の分析と考察
手だての試案に基づく実践について、支援を必要とする幼児だけではなく周りの幼児に対する保育が充実することが明らかとなった。
- (5) 幼児一人一人が共に育ち合う指導に関する研究のまとめ
本研究で作成した保育ガイドは、園内支援体制に基づく保育を行う上で支援を必要とする幼児のみならず、周りの幼児の保育にも有効であることの見通しをもつことができた。

2 今後の課題

本研究における課題は次の2点である。

- (1) 指導の手だての改善
指導実践をとおして明らかとなった保護者や関係機関との連携等の課題について、幼稚園でより活用される保育ガイドとなるように改善・修正を行っていきたい。
- (2) 支援計画の活用について
本研究において、園内支援体制に基づいた支援が幼児一人一人の育ち合いを促すことにつながることを明らかにすることができた。しかし、支援計画にかかわり幼稚園の指導計画との整合性や小学校との接続などの課題が新たに指摘された。今後、支援計画をより効果的に活用するために研究を深めることが必要だと考える。

<おわりに>

この研究を進めるに当たり、研究協力園の先生方、幼児の皆さんに心からお礼を申し上げます。併せて、研究協力員の先生方に感謝申し上げます。

【引用文献】

文部科学省（2003）,『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）』,文部科学省

【参考文献】

渡部信一・本郷一夫・無藤隆編集（2005）,『保育の内容・方法を知る 障がい児保育』,北大路書房

無藤隆・神長美津子他編集（2005）,『「気になる子」の保育と就学支援』,東洋館出版社

無藤隆監修（2006）,『実践 新幼稚園教育要領ハンドブック』,学習研究社

本郷一夫（2006）『保育の場における「気になる」子どもの理解と対応』,ブレーン出版

岩手県立総合教育センター（2004）,『小・中学校の通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒に対する「校内協力に基づく」指導の在り方に関する研究』,岩手県立総合教育センター

岩手県立総合教育センター（2006）,『中学校・高等学校における特別支援教育校内体制の確立に関する研究』,岩手県立総合教育センター